

## 巻頭言 「褒める」

宇野 元

ある日曜日の夕方。講壇奉仕からの帰路。新しい巨大ビル群の谷間を東京駅まで送ってもらおうと、私の足はいつものように丸善へみちびかれました。そして長年の習性にあらがわず、小さくなった洋書売り場に。Philosophy 哲学の棚の前に立つと、一番目立つ所に、カール・バルトの『ロマ書』の原書と英訳本が二つ並んで置いてあるではありませんか！ 1922年に出版されたこの本が、ほぼ100年の時を越えて、現代日本の老舗書店にこんな粹なしかたで置かれている。心のときめき。

カール・バルトには、神学の著作家としての稀な賜物がありました。親友エドゥアルト・トゥルナイゼンは、おそらくかなり早くからそれに気づき、この方面で互角であろうとせず、一歩引いて、傍らに付き添う者として歩むことを決めたのだと思います。トゥルナイゼンは、友の言葉によるこんで耳を傾ける者、最良の理解者となり、友の執筆を助ける者となりました。一方のバルトも、トゥルナイゼンの愛ある意見を求めました。とりわけ、トゥルナイゼンは褒める人でした。「カール、ぼくは君の言葉に生かされている。」時代を経ても命を保つバルトの仕事は、この存在があつてこそ生まれていったのです。

使徒パウロも褒める人でした。決して理想的ではない共同体、あげつらえば欠けだらけの群れに向けて、熱心に記します。「わたしが愛し、慕っている兄弟たち、わたしの喜びであり、冠である愛する人たち」(フィリピ 4, 1)。「わたしたちの主イエスが来られるとき、その御前でいったいあなたがた以外のだれが、わたしたちの希望、喜び、そして誇るべき冠でしょうか」(1テサロニケ 2, 19)。……

共同体において、褒めることは大切です。キリストの共同体においては、なおさらのことです。神の恵みは、人間を立ててくれます。人間がお互いを駄目にしてしまうのと反対に。有名な詩人が、批評されることをどう思うかと尋ねられて、三度、こう繰り返しました。「とにかく、褒めてもらいたい」と。神の家族のあいだでは、なおさらのことです。兄弟姉妹の長所を神の贈り物とみるとき、悪く言う理由はひとつもありません。お互いの賜物を見つけ、知らせ合うものでありたいと思います。一人一人が自分の持ち味を自覚し、のびのびと発揮できるように。さらに、自分の持ち味を恵みによる委託として受けとめる者となるように。受けとめた委託を、恵みの証しとして果たす者になるように。